



戦没した船と海員の資料館が開設されるまで「個人
単位の収集から、記録する会、資料館へと発展、あ
る遺族の思いから」「戦没した船と海員の資料館」

岡村，世紀一

(Citation)

海事博物館研究年報, 53:8-10

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504877>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504877>



戦没した船と海員の資料館が開設されるまで 「個人単位の収集から、記録する会、資料館へと発展、 ある遺族の思いから」 「戦没した船と海員の資料館」

スタッフ 岡 村 世紀一

著者紹介

おか むら せき いち 氏
岡 村 世紀一 氏

所属 「戦没した船と海員の資料館」スタッフ
出生 山口県下関市長門二見 特牛（コトイ）
1941年3月31日生 代々 大工の家系
S.34（1959）関西汽船入社 別府航路、外航
を経歴
S.39（1964）早駒運輸入社 タグボート船長
として活躍
H.12（2000）早駒運輸定年退職 H.14まで嘱
託勤務
同年8月 「戦没した船と海員の資料館」開館
以降 同館開設からスタッフとして現在も活躍中



1. 発端

1984年春、一人の遺族が勤めていた会社が倒産し、「人生五十年」と言われて育ってきた自らを振りかえって見ると、何も残っていない自分に暗澹とした。（大井田 孝氏）

成人した子供達や、自立している妻に「お父さんだけのことを考えて」との言葉に励まされ、これからの仕事を考えることが出来た、生活の糧になる仕事より戦没した親父と言う人間がこの世に生きていた、と言う証を遺す仕事に向かう思いが

次第に鮮明となり情報の探索をすることになった。

戦時中、日満航路に就航していた満州丸（日本海汽船）の船長として乗船し六十七歳で戦没した父と、満州丸の墓碑をと思い、先ず海上労働協会が編集した「日本商船隊戦時遭難史」を基に、戦争で沈んだ船の記録を探し始めた。



進める内に個人域を脱し、戦争で犠牲になった「船乗りの問題として」これを集大成しなければならぬと思う様になった。

時を同じくして関係する友人や知人が個々に私と同様な遺族であり関心のある者が多数居られ、共同して目標に向け行動を開始した。

昭和46（1971）年3月、観音崎に戦没船員（60331名）の碑が開設され、個々の同行動に弾みがついたが、個人では無理もあり、会を作ろうとの声が出てきた。



その後昭和56（1981）年4月に日本殉職顕彰会が設立され奉安された。海のほかにその墓を持たずアジア・太平洋の広い海域で無念の死を遂げた戦没船員の数は60,331人と記録されており、同被害船舶数は15,518隻、官民一般汽船は3,575隻（商船3,207隻）漁船1,595隻、機帆船2,070隻その他となっている。

2. 「戦没船を記録する会」

戦後五十年を間もなく迎えようとする時代、各方面で戦時記録の整理と検証が行われようとしており、戦時船舶と船員の災害を見通せる記録作りとして「戦没船を記録する会」を平成6（1994）年3月26日に設立した。

元船員や戦没者の遺族、海員組合や関係者等が集まり、念願の発足となる。式典の様子はNHKの取材により翌朝テレビで放映された。

開設一年経過後に会長として、川島 裕氏を選任した。

記録する会は会員増加に伴い収集資料も増加し、固定的に保管や掲示が可能な場所として、横浜の赤煉瓦倉庫と交渉を行ってきたが実現には至らず資料館構想は中断した。

平成7（1995）年8月12日、日本経済新聞全国版の五段見出しで「戦時の民間船―悲劇を後世に」と八段抜きの記事「沈んだ百三十隻の記録集出版」を掲載して頂いた。それは戦後五十年に漸く間に合い、記録する会の象徴的な集大成となった、各地での展示会開催も来館者増となり、「戦没船を記録する会」の存在を世間や海員組合の認めるところとなった。会則も総会で審議を行ったが、決定には至らず理事会に付託した。理事会は会則に銘碑建立を明記した。

3. （会則の目的）

この会は、海員と戦争に関する調査と研究を行い、その歴史を明らかにし、かつ調査結果を基にして戦没船の記念碑を建立するなど、後世に保存することを目的にするとした。

戦時船員の災害を全て見通すことのできる記録づくりの第一歩として戦没船の記念碑を作ること目標に会の事業を踏み出す。銘碑は一船毎のアルフォト印刷（永久保存）した戦没船の写真を一

堂に飾り、鎮魂の祈りを捧げ、併せて集めた記録を保存し後世に残す活動を開始した。



資料収集の傍ら平成6（1994）年9月に理事会は戦没商船の記録写真集を出版することを決め、戦後五十年にあたる翌年の8月に「知られざる戦没船の記録」上・下巻を出版した。



上巻は「激戦の海での特攻船団」四章で構成

下巻は「断末魔の海上輸送」テーマに六章で構成、9月9日、東京・晴海のマリナズコートで出版記念会が開催され、上下とも2000組出版された。

その後も戦争展を各地で開催してきたが、役員会は本来の目的である保存と展示については緊急な課題として取り組むとして平成11（1999）年2月13日の会議で海員組合関西地方支部の二階ホールを「記録する会」の保存と展示場所として海員組合に要望することになった。

これを踏まえ2月23日に川島 裕会長と中西昭士郎組合長の会談が組合本部で行われた。

会談は和やかな雰囲気が始まり、川島会長は「記録する会」運動の趣旨と、組合に要望するに至った経緯を説明し協力を要請した。

中西組合長は要望の趣旨を理解して「記録する会」が収集した資料を関西地方支部館内に保存することを了承した。この件は11月に開催する全国

大会で提案され、関西地方支部館内に永久保存する方針が決定された。

資料館の名称は「戦没した船と海員の資料館」とした。

4. 資料展示室の変遷

開設当初、第一展示室の船員の方々の談話室を改装、開設から5年後に第二展示室奥の日本間を改装

開設から15年目に南展示室組合資料の収納室を改装

以上の改装を経て組合会館二階のフロアーは全て資料館の展示室に変容し、全ての展示室と展示物の閲覧順路も右回りに確定し、来館者の滞りを少なくする様に配慮し来館者の対応に勤しんでいます。

5. 結び（資料館の使命）

資料館開設から25年の歳月が経ち、来館される方々もコロナ禍を経て増加傾向にあり、外国の方も見えられる様になりました。

戦後80年が過ぎ、この星の彼方此方で手を替え品を替え同じ様な争いが繰り返されていますが、悲しい人間の性ですね。………

「戦争を知らない世代へ、徴用され戦没した船と海員が（乗組員）が蒙った悔恨と修羅の記録をとこしえにつたえてゆく」

補足：資料館所蔵資料



戦没船7200隻の航跡（五十嵐温彦 著）

弊館では上記資料を活用し、ご遺族やご友人等からの様々なお問合せに対応しています。

最低でも乗船されていた船の船名、ご氏名が分かれば戦没された日時と海域がお答えできます。何か手がかりが御座いましたら是非ご来館の上スタッフにお声がけください。

忘れ去られた徴用船

太平洋戦争において多くの民間船が徴用され、多くが海の薄層となりました。対馬丸、阿波丸といった、それら戦没した船舶について知ることのできる施設の一つが、「戦没した船と海員の資料館」です。

戦没した船と海員の資料館
JR北町駅から徒歩10分（メリケンパーク付近）、神戸市中央区港通
開館日時：平日10時～17時 全日本海員組合関西支部ビル内
太平洋戦争で犠牲となった多くの民間船舶と船員に関する写真などの資料を展示し、平和について考える施設です。

この資料館によれば、1941～45年にかけて戦没した船舶の内訳は以下のように、半数以上を機帆船と漁船が占めています。一般商船に比べると乗組員などがはるかに少ないため、これまでほとんど顧みられておりません。

官・民一般商船	3,575 隻	船に比べると乗組員などがはるかに少ないため、これまでほとんど顧みられておりません。
機帆船	2,070 隻	
漁船	1,595 隻	
(合計)	7,240 隻	

過去にはNHKの特番で静岡県焼津の徴用されたカツオ漁船や兵庫県香美町の漁船が取り上げられた例があります。地元では身内が慰霊碑を建立し慰霊祭を行ってきましたが親族も高齢化し、徐々に人々の記憶から消えようとしています。

これら100トン未満の小型木造船は軍部により申し訳程度の機銃を装備されたり、黒く塗装され何の護衛もないまま食料等の物資を乗せ南方へ帰れぬ航海へと向かいました。特に遠洋漁船や機帆船はほとんどと言ってよいくらい軍に徴用され、終戦後には漁師、船員がまったくおらず、海運業、漁業が再開できない状況になりました。

写真：船首に機銃銃を装備した漁船（左）と機帆船（右）の攻撃を受ける機帆船（左）と機帆船（右）

木造船機帆船の徴用

大正から昭和にかけて瀬戸内海を中心に各地に工業地帯が起り、工業燃料となる石炭の大量運搬が必要となりました。そこで従来の木造船に代わって焼玉機関を搭載した機帆船が登場し、瀬戸内の小さな造船所で木造船機帆船が大量に建造されました。

当時各地の物流を支えた「海の軽トラ」とも言える機帆船は、1937年の日中戦争の勃発以降、戦火の拡大にともない軍部の統制下におかれました。そして機帆船も次々と軍に徴用され、南方への軍需物資の輸送に従事させられました。

機帆船は数名の乗組員でほとんど戦闘装備なしの状態での任務にあたり、日本から島伝いに南方方面に向かって、砲撃に恐れ米潜水艦の攻撃を恐れながら航海しました。機帆船や漁船は正確な記録が商船と残っていませんが、小型であった故に米軍の攻撃を免れて生き延びる事もあったようです。それでも要領果の例では、伯方町で60隻ほどの機帆船の7割が帰還せず、波方町でも140隻中残ったのはわずか22隻でした。*

※ 太平洋戦争時における船員戦没者数の年齢別内訳

年齢	戦没者数	年齢	戦没者数
14	988	20～30	16,610
15	2,868	30～40	13,196
16	3,184	40～50	8,539
17	3,967	50以上	3,238
18	4,208	総計	60,643
19	3,845	内20歳未満計	19,060

（出所）日本海員組合資料館「戦没船員名簿」データベースより

徴用された船員の戦没
戦時中は船員不足を補うため、商船学校では就学期間を4年間から6か月に短縮させ、15～16歳の若者を商船に乗り込ませました。徴用された非戦闘員である船員は、6万人余が戦没していますが、約3分の1にあたる1.9万人が20歳未満の若者である事実は、学徒動員などとあわせ、注意されるべきでしょう。

（出所）日本海員組合資料館「戦没船員名簿」データベースより

館内展示パネル「忘れ去られた徴用船」